
 書 評 ・ 紹 介

Emily W. Kane

*The Gender Trap: Parents and the Pitfalls of
Raising Boys and Girls*

New York University Press, 2012, 287pp.

誰かから子どもが生まれる予定だと告げられると、多くの人は、生まれてくる子が男の子か女の子かをたずね、その答えがそれとなく想像するその親子のイメージに少なからず影響するのではないだろうか。子育てを通じたジェンダーの実践をテーマとする本研究において、著者のKane氏はまず、親に対し、性別選好とその理由を質問している。続いて、子どもの行動・関心、それらに対する解釈について様々な問いを投げかけている。それらをもとに、親は子のどのような思考、特性、関心、行動を促進あるいは回避しようとするのか、ジェンダー化した何かを再生産あるいはそれに抵抗しようとする親の行為の動機は何か、親自らはこの過程でどのような役割を担っていると認識しているのかに焦点を当てた分析を行い、親のジェンダーへのアプローチを次の5つに分類している。(1)自然派「自然に決まっている」：子のジェンダー的なものは生物学的に規定されると考え、子がジェンダー規範に反した行動をした場合、人からどう見られるかを気にする。(2)養成派「親や社会の作用による」：ジェンダー的なものは社会で育まれると考え、子に積極的にジェンダー規範に沿うように働きかけ、人の目は気にせず、ジェンダー規範の再生産が親の役目とみなす。(3)精錬派「意図的ではないが、一定程度規範は再生産される」：ジェンダー規範に沿う取り組みと抵抗する取り組みをほぼ同頻度で行い、他者の反応に敏感である。(4)革新派「逆のことをすべて褒める」：ジェンダー規範に抵抗し、人がどう思うかは構わない。(5)抵抗派「ジェンダー化した社会で生き残る」：ジェンダー規範に抵抗しながらも、人がどう思うかを気にする。

本書の序章では米国のジェンダーのあり方に対する著者の問題意識を整理し、1章では性別選好に関する考察を行い、2～6章では上述の5分類を順に分析し、結論ではいかにジェンダーの罠から逃れるかという観点から、社会の様々な領域への提言がなされている。これは著者の個人的な価値観の押しつけではなく、1990年代から20年以上の年月をかけてインタビューした、3～5歳の子をもつ42人の親（母24人、父18人、同性カップルの親、ひとり親、階層や人種のバリエーションも含む）のほぼすべてが、子にとって生きやすいのはジェンダー規範がゆるやかになった社会だと語ったことに依拠している。

本書は、親の語りを巧みに使いながら読みやすく書かれているが、異性愛規範とジェンダー規範の交差にも目を向けるなど、議論を単純化しすぎずにジェンダーの複雑性を描くことに成功している。個人的には、特に父親が男の子に対して行うジェンダー化の頑強さが読み取れ、男性のジェンダー意識や行動が変わりにくい原因を垣間見たように感じた。子育ての実践こそがジェンダー関係を変える切り札を握っているという本書の結論は説得力があり、ジェンダー秩序の根本に迫りながら、人口研究のテーマである性別選好についても多くの示唆に富む一冊である。(釜野 さおり)